

九州大学所蔵標本・資料

Material and Specimens

possessed by

Kyushu University



九州大学総合研究資料館設置準備委員会編 1985



Acanthoceras takahashii MATSUMOTO
白亜系 セノマニアン階 中部, 三笠層産

『九州大学所蔵標本・資料』発刊に当たって

九州大学長

田 中 健 藏

本学は創設以来70余年、わが国における有数の総合大学として、学術研究と教育に邁進してまいりました。その間に挙げられた業績は、学問の進歩と社会の発展に多大の寄与をなしてきたものと自負するところであります。これら伝統のある業績は、諸先輩の努力と精進によるものですが、それは営々と引き継がれ発展しながら、現在の私達の研究・教育活動を支える基盤となっているのであります。

このたび、『九州大学所蔵標本・資料』が刊行されるはこびとなりましたが、本学が所蔵する莫大な標本・資料の中から、ごく一部ですが、ここにとりまとめ公刊されることは、実に意義深いことと考えます。人文・社会・自然科学の分野で、地域における特性を活かしながら、多岐にわたる研究活動がすすめられるなかで収集された素材は、過去における研究成果の上に新しい研究を進展させる過程で蓄積されてきました。そして蓄積された標本・資料は、それぞれ伝統ある研究室のもとに保有されて研究・教育に供されてきましたが、1冊に集成されることによって、相互に啓発し刺激されてさらに新しい知見を加えることも可能でありましょう。個々の標本・資料は、どの一つをとりあげても貴重なもので利用価値が高く、諸先輩の苦勞の跡を物語るとともに様々な情報を私達に伝えてくれます。新しい観点から見直すことによって、研究素材として新しいのちが付与されることにもなります。未知の問題を開拓するための手がかりと勇気を与えてくれることもありましょう。今回の冊子刊行は、本学における研究・教育の活性化を図るうえでも貴重な第一歩であると考えております。

これまでも、これら貴重な標本・資料は学内での研究と教育とに活用されてきたばかりではなく、広く国内または外国の学者の研究にも供されることがしばしばであります。本学の財産という範疇を越え、学術上重要であるばかりでなく、国際的な学術交流のためにも、標本・資料の整備は重要な課題であります。これを契機にして一步ずつ前進をはかり、総合大学である本学の特性を活かし、社会的にもより活用することが出来るような方策について積極的な検討がすすめられることを、心から念願するものであります。

刊行を担当された首藤次男理学部教授をはじめ総合研究資料館設置準備委員会委員の方々のご努力に対し、感謝するとともに今後の発展を期したいものであります。

総合研究資料館設置に向けて

九州大学には、この小冊子の末尾に表示されているように500万点を超える量の学術標本・資料が蓄積されています。500万点というのはかなりの量であって、事実、自然史、文化史関係の研究室ではそれぞれ標本・資料を活用するために標本室、資料室をもうけて整理・保管していますが、そこには収容しきれずに研究室、はては廊下にまで溢れるという深刻な状態になっているところも少なくありません。この事態をどう見るかは立場によって随分違ひましょう。標本・資料がそれ程重荷であるなら、いっそ捨てて身軽になればよいという考え方から、これがなくては研究が進まないんだという主張まで、様ざまな考え方があります。現在、大学で進められている研究はきわめて多くの分野にわたっているので、どういう分野の研究にたずさわっているかで標本・資料の評価が分かれてくるのは、ある面ではいたし方ないことでありましょう。

それ程莫大な量の標本・資料を確保しておく必要が本当にあるのでしょうか？標本・資料を使う者の立場から見ますと、確かに標本・資料の効用に関しては量が物を言うという一面があるのは確かなようです。それは特に自然史・文化史の研究分野ではっきりしていると思われまふ。一つの専門分野に関連する標本・資料がある水準を超えて集積されると、それを整理・再分類することによって、それまではっきりしなかった事実や法則性が次第に分かってくる場合があります。又、資料不足でしたくても出来なかつた研究が可能になることもあります。標本・資料の集積効果です。

このように大量の、そして莫大であるが故に価値の高められた九州大学の標本・資料はどのようにして蓄積されたものでしょうか。この蓄積の過程というものが大学の標本・資料の最も重要な性格を表わしていると考えられます。創立以来70年を超えるこの大学で行われてきた個々の研究の素材として、標本・資料は収集されてきました。それが一般の博物館のように単に網羅的に収集されたものではなく、研究に則して収集されたものであることが特徴であると考えられます。言い替えると、九州大学の標本・資料の大部分は自然史・文化史分野の諸研究室で実施されてきた研究の土台であり、研究の歴史を直接反映した生き証人と言えましよう。伝統のある研究室では、先人の業績の上に後継者の業績が積み重ねられて発展してきており、それに対応して標本・資料も継続的に、しかも発展的に集積されてきています。例えば、農学部動物学研究室では莫大な所蔵標本の一部として、整理済みのものだけで13,800点にのぼる日本及び西太平洋地域の甲殻十脚類のコレクションがありますが、これは故大島広名誉教授、その研究を発展させた三宅貞祥名誉教授、更にその後継者の方がたの研究努力に伴って蓄積されたものであります。紙数の関係で1例しか挙げませんが、昆虫、水産、林産、地質、考古などの研究室をはじめ、自然史・文化史系の諸研究室の標本・資料の殆どはこのようにして集められたものです。このように、九州大学の標本・資料の大部分は研究の素材として、研究の継続的な発展に対応して蓄積されてきたものです。従つてそれらはただ単に研究の記念碑として貴重であるばかりでなく、先人の研究の追試に欠くことのできないものです。更に、それらを新しい視角から再整理・再分類することによって、先人の研究を超えた新しい発展の土台にすることができるという積極的な意義もあります。

これまで述べてきたようなものが九州大学の標本・資料の大部分を占めています。これを第一の範疇の標本・資料としますと、第二の範疇に入るものは特定分野に関して網羅的に収集された標本・資料であり、第三の範疇には、物質科学と応用科学分野で過去の実験を担ってきたとか、かつて産業を支えてきた機械・器具などが含まれます。第2の範疇に入るものに、農学部昆虫学研究室の蝶・蛾の36,060点にのぼる杉谷コレクション、理学部地質学教室の鉱物1,200点の高コレクションなどがあります。第2の範疇の標本・資料は主に自然史・文化史関係であり、第一の範疇のものを補完する機能があることは、その利用のされ方を見ると明らかです。第三の範疇の標本・資料は物質科学や応用科学、産業の発展のあとを示す記念碑として、学史的・教育的な価値があることは言うまでもありません。このように性格の違う標本・資料群を一つの総合研究資料館の中で有機的にどう活用していくかは大きな課題の一つと考えられます。

上述のような意義と価値をもつ標本・資料が実際にフルに活用できる状態にあるかと問われると、大変心もとない返事しかできない現状です。組織的に整理・保管されている標本・資料ももちろん少なくありませんが、関係者の努力にもかかわらず多くの部屋に分散して、非組織的に保管されているものが多いのも事実です。更に残念なことには、関連のある標本・資料が複数の教室に分散している例も稀ではありません。そういう訳で、標本・資料を効率よく利用し、新しい研究を効果的に再生産するという理想にはほど遠いと言わざるを得ません。今置かれて条件のもとで理想に近づけるよう努力するのは、もちろんそれぞれの研究者に課せられた責務であるのは言うまでもありません。しかし現状ではその努力だけではごく限られた効果しか期待できません。標本・資料を統合したうえで分類・整理して、研究の再生産にいつでも応じられるような状態で保管するには、労力のほかにそれなりの空間と設備が必要であります。この意味から総合研究資料館の設置が強く要望されるわけです。

総合研究資料館が設置されると、先ず関連分野の標本・資料が組織的に集中するので、情報センターの役割りを受持ち易くなります。その結果として本学の研究者により研究環境ができるのは申すまでもありませんが、外部の研究者にとって標本・資料が格段に使い易くなり、実質的な門戸解放となるのも明らかです。又、異なる分野の標本・資料を統合するので、そこで行われる異なる分野の研究が、方法論的な面で相互に影響しあい、新しい飛躍を生むことも期待されます。更に、整理された標本・資料の一部を計画的に展示することによって、一般市民を含め、専門外の人びとに九州大学で行われてきた研究を媒介として、科学の一端を理解していただくことができましよう。

これまで述べてきたことからご理解いただけるように、九州大学に設置される総合研究資料館は、その期待される機能を果たすためには、保管、研究、展示の三つの柱で構成されることが必要であると考えられます。そして標本・資料が研究の所産であり、展示は研究結果を下地としていることを考えれば、そこでは研究という柱が中心に据えられるべきであるのは明らかです。研究あつての大学資料館であることは、いくら強調してもし過ぎではないと思われます。

この委員会が昭和46年に発足して、すでに13年を経過しましたが、いまだに設置を実現できないのは、諸般の事情があるにせよ誠に残念なことであります。今後とも総合研究資料館の新設に、いっそうのご理解とご後援をお願いいたく、この小冊子を作成した次第です。

九州大学文学部考古学陳列室



文学部考古学研究室の初代教授であった故鏡山猛氏は、早くから九州各地の重要遺跡の調査を手がけられてきたが、その間、学術発掘によって得られた出土品は本陳列室の骨格をなしている。昭和34年に考古学講座が開設されたとき、研究室とともに陳列室は本部地区(現、工学部)にあったが、昭和39年に現在の貝塚地区に移転した。その後、昭和57年に、文学部の改修工事の際、さらに現在地に移ったが、陳列室は大幅に縮小し、収蔵庫と兼ねるようになった。したがって、重要遺物のより効果的な陳列、公開が待たれるところである。

収蔵品は、九州各地の、旧石器時代から近世まで各時代にわたる出土

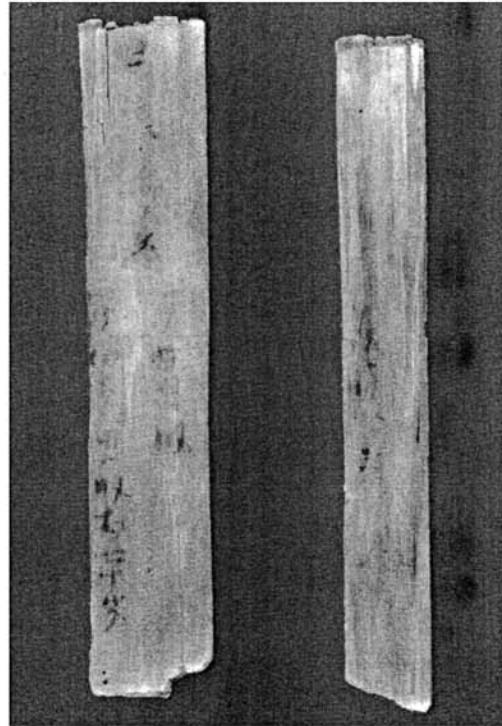
品が大半を占めるが、中山平次郎博士収集のコレクションをはじめ、朝鮮・中国・パキスタン・フランスなどの遺物も含み、その総数は万余をはるかにこえている。

旧石器・縄文時代のなかでは、佐賀県茶園原遺跡出土の旧石器時代の尖頭器や、長崎県原山遺跡の縄文時代晩期の支石墓関係の土器が著名である。弥生時代では、まず、福岡市板付遺跡出土の弥生土器・磨製石器群とともに、福岡市藤崎出土の壺形土器は、稲作開始期の標準遺物である。ついで、佐賀県宇木汲田遺跡の甕棺墓に幅葬されていた細形銅剣や中細形銅矛は、初期の舶載品であるのに対して、福岡県岡垣町発見の中広形銅剣は国産品である。福岡県三雲出土の広形銅戈鏃は、きわめて珍しく重要文化財の指定を受けている。そのほか、福岡市弥永原出土の勾玉鏃型と、福岡県須玖岡本出土のガラス勾玉や、福岡県大南出土の小銅鐸など、全国的にみても、弥生時代中・後期の代表的遺物を保有している。なお、長崎県カラカミ遺跡発掘の大量の弥生土器をはじめとする遺物群は、弥生時代中期後半から後期前半にわたる代表的な資料として注目に値する。古墳時代では、中・後期の一括資料に貴重なものがある。福岡市老司古墳出土品のなかでは、短甲や銅鏡類、福岡県山の神古墳出土の衝角付冑や鉄器類、そして、福岡県花見古墳出土の須恵器と金銅装刀子など、それぞれの時代を代表する遺物がある。奈良時代では、大宰府や豊前の古代寺院出土の古瓦、そして、中世都市博多出土の陶磁器類も圧巻である。そのほか、朝鮮の瓦博・陶磁器、中国の銅鼎に貨幣類、さらに、フランスの旧石器や、パキスタンのガンダーラ仏頭など貴重な考古資料は、枚挙にいとまがない。

筑紫地区埋蔵文化財調査室

筑紫キャンパス内遺跡の調査は、はや7年目が過ぎようとしている。発見された遺跡は、縄文時代後期から現在まで断続し、主にこの地が人間活動の舞台となったのも、弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代後期、奈良～平安時代の長きに渡っている。従って、発掘調査で出土した遺物も多彩かつ大量であり、パンケースにして約3,000箱を越えようとしている。現在これらの遺物は、鋭意基礎的整理作業を続行中である。ここでは、大変貴重な出土遺物のうちのいくつかを、簡単に紹介したい。

弥生時代の豊富な遺物の中でも圧巻は、土器溜から多量に出土した、弥生時代中期中葉(紀元0年ごろ)から後葉にかけての祭祀土器群である。中葉の土器群は、やや小型の筒形土器や小壺などを中心とし、丹を



塗ってない土器が多い。後葉の土器はすべて丹が塗ってあり、大型の筒形土器、各種の壺、高杯、鉢など多種多様である。中には佐賀平野の特徴を有する壺もあり、かの地との交流を荷負った集落であったことを思わせる。これらの祭祀土器は、土器の組み合わせなどから、墓前祭に用いた土器を一括破棄したものと考えられ、福岡平野の祭祀土器を知る好例である。また、遺構に伴ってはいないが、弥生時代中期ごろに使用された。中細銅戈の鑄型が発見されており、この地でも青銅利器の生産が行われたと思われる。しかし、弥生中期と考えられる石包丁の石材は粘板岩が多く、立岩産の輝緑凝灰岩製石包丁が優先する春日丘陵周辺の遺跡と異なっている。

古墳時代後期の窯跡は、窯の本体は破壊されていたが、灰や焼き損じた大量の須恵器が溜った灰原が発見された。牛頸川流域は、牛頸古窯跡群と呼ばれる九州最大の須恵器の生産地であった。筑紫キャンパス内の遺跡はその東端にあたり、しかも牛頸古窯跡群中では最も古い須恵器が発見されている。

奈良時代の溝の一つからは、土器や木製の盤と共に2点の木筒が発見されている。1点には文字が残り、「院」に属する田畑の面積を記したものの一部と考えられる。総合理工学研究科棟西側の丘陵上には、同時代の瓦葺きの建物1棟を含む建物群があり、そこから当時の役人のベルトを飾った白色半透明の石帯が発見されている。この建物が木筒の「院」に相当するものか、今後の建物群の性格究明が重要であろう。



仏 頭 (ガンダーラ伝来)

ガンダーラより伝来した仏像は、我々が慣れ親しんだ仏像と異なった容貌を持つことから、これまでに多くの人々を魅了してきた。本学文学部考古学研究室には四体のガンダーラより将来された仏像が保管されており、ここにその一体を紹介する。

本像は片岩製で、総高13.9センチの小ぶりな如来形の仏頭である。現状から推して立像か坐像かの判断はできない。元来は仏龕のなかに彫られ、頭に円光を負い、全身に彩色が施されていたと考えられる。現在は、後頭部の背後と首の部分から本体部と切断され、長年の間に彩色は剥落して岩肌が露呈し、額中央の白毫は失われて小孔のみが残っている。彫りの深い目鼻だちは、ギリシア・ローマの彫刻を思わせ、眉から鼻梁への線が連続

する表現は、我国の白鳳彫刻にも形式的に継承されている。面部は、U字型をえがくのびやかでゆったりとした曲線によって輪郭づけられ、両頬のふくらみが表わされている。鼻先より鼻梁を通って肩先まで連続する左右二つの曲線、眼窩を縫う小曲線、上瞼・下瞼の線は、面部全体に心地よい抑揚をつけている。頭は、大きな波状文がゆったりと曲線をえがき、上方より頭部をつつみこんでいる。こうした曲線的感覚に裏づけられた造型によって、ギリシア・ローマ的な彫りの深い顔貌は、温和で柔らかいものとなっており、V字に結ばれた口元には堅強な意志が窺え、悟りを開いた人間の姿を見てとることができよう。

ガンダーラ美術は、インドのマトゥーラ美術とともに紀元1世紀頃はじめて仏を目に見える像として造型化した。その展開は、初期の仏伝を中心とする時期、中期の独尊像を中心とする時期、後期のストゥッコによる造像期の三つに大きく分けられる。本像の製作期は、ガンダーラ中期の独尊像を造像の中心とする時代にあたり、3世紀頃と考えられる。

ガンダーラ仏に接する時、我々が礼拝の対象として見ることは稀である。それはガンダーラ仏のもつエキゾシズムのためだけではないだろう。ガンダーラ美術の根底にある、人間釈迦の生きる姿への追想は、悟りを求めて生きる人間にそなわる美しさへの想いと重なり合って我々を魅了するのであろう。

(総高13.9センチ 頭頂～顎 10.5センチ 面幅 10.5センチ 3世紀)



『総合資料館』収納・展示用資料について

教育学部

教育学部所蔵の関係資料は、附属比較教育文化研究施設(主として、アジア地域の文化・教育の調査研究を実施)、教育史講座(日本教育史)、社会教育学講座などに、下記のような資料が蒐集・保管されている。

1. 比較教育文化研究施設

- | | | | |
|-------------------|-----|--------------------|-----|
| (1) 韓国の小中高校用教科書 | 64点 | (5) インドネシア小中高校用教科書 | 31点 |
| (2) フィリピンの小高校用教科書 | 48点 | (6) インド小校用教科書 | 6点 |
| (3) タイの小中校用教科書 | 89点 | (7) アメリカ小中校用教科書 | 46点 |
| (4) マレーシア小中高校用教科書 | 30点 | | |

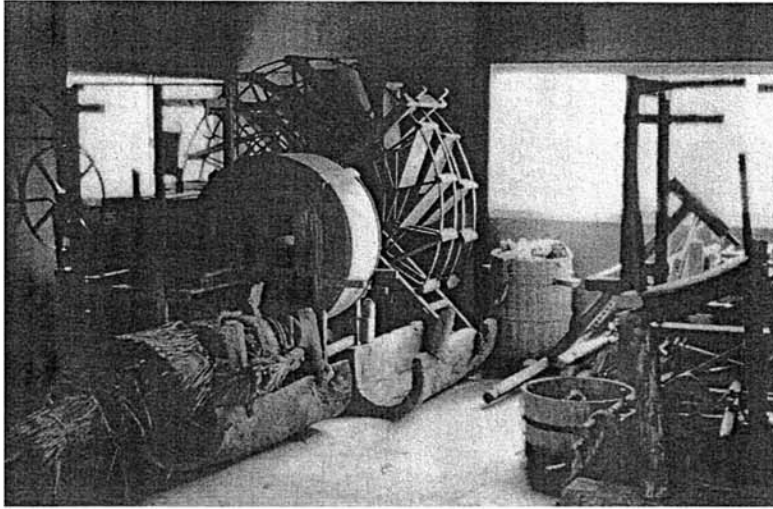
2. 教育史講座

- | | | | |
|-----------------|-----|-----------------------|-----|
| (1) 明治初期教育稀観書集成 | 36冊 | (3) 大正期国語、修身書 | 18冊 |
| (2) 明治後期国語読本 | 10冊 | (4) 昭和21～23年小中校社会科教科書 | 15冊 |

3. 社会教育学講座

- | | |
|-----------------|---------------------|
| (1) 戦後福岡県内公民館事蹟 | (6) 戦後福岡県内ナイトスクール事蹟 |
| (2) 〃 青年学級事蹟 | (7) 〃 主事研修会事蹟 |
| (3) 〃 視聴覚教育事蹟 | (8) 〃 文化祭類事蹟 |
| (4) 〃 新生活運動事蹟 | (9) 〃 公民館連絡協議会事蹟 |
| (5) 〃 婦人教育関係事蹟 | 計 約160点 |

教育学部の場合、研究対象が人間であるために、モノを研究対象としているような他の学部と比べて、物的な資料が山積するという状態ではない。そして、思想や制度に関する研究の場合に利用される資料は、文献図書の種類(たぐい)が中心になる。教育心理系や教育系の方法・技術にかかわる講座の場合も、直接に調査研究に使用する機材については、それぞれに保有して稼働中であるため、総合資料館に納入するモノは、さほど多くないのが現状である。



(経済学部所蔵の民具)

経済学部所蔵の民具 (185点)

本資料は、昭和43・44年度の科学研究費（課題名「消滅しつつある生産用具の保存とその地域的・発達系統史的研究—とくに農業・石炭礦業・水産業を中心にして—」）の補助を得て、佐賀県多久市、杵岐、対馬、その他の地域で蒐集した農具・漁具を主な内容としている。なかでも捕鯨用のモリ、精白用の泥唐臼、脱穀用の竹千歯・鉄千歯など現在入手が殆んど不可能なものがある。

石炭研究資料センター所蔵の造形資料

1. 佐賀県多久市周辺の炭坑用具 約 200点

本資料は、前記の経済学部所蔵の民具と一緒に蒐集されたものであって、昭和54年同センター開設とともに移管された。

手掘り時代のツルハシ、改良ツル、一尺、セツウ、安全灯などの原資料と、スラ、マブキ、マブベコなどの複製資料とを主な内容としている。

2. 炭坑札 152点

炭坑札は炭坑が発行した金券である。この金券は、斤券・炭券・山札・採炭切符とも呼ばれ、主として筑豊の諸炭坑で、明治15年頃から使用され始め、大正中期をピークに昭和30年頃まで発行された。大正8年筑豊石炭鉱業組合の調査によると、現金のみで賃金を支払っている炭坑は、三井・三菱等の財閥系を始めとする45坑、現金と炭坑札併用の炭坑は、貝島・麻生・大正鑛業等56坑、炭坑札のみで支払っていたのは蔵内鑛業等10坑となっている。しかし現存する炭坑札は非常に少なく、現在70炭坑、159種のもが知られているにすぎない。

センターでは、昭和54年に84点を購入し、その後稲富清氏より36点、宮崎太郎氏より11点、許斐友太郎氏より16点、松本一郎氏より5点の寄贈を受け、屈指のコレクションとなった。

3. その他

その他、センター所蔵資料には、佐賀県西杵炭鑛で使用されていた坑内運搬用ディーゼル機関車、鉄製炭車各1台、細川章氏蒐集炭坑用具、三菱端嶋坑で蒐集した炭坑用具、或いは三池炭鑛労働組合より寄贈を受けた組合旗、鉢巻、プラカード等多数のものを保管しているが、未整理である。



理 学 部

地質学教室は岩石・鉱物約9万点、化石約6万点の標本を所蔵している。その保管の為3標本室、計312平米を設けているが、それに収容しきれない標本は100平米分以上あり、研究室、実験室等に分散格納されている。特色のあるコレクションとして次のものが挙げられる。

日本産マンガン鉱物・鉱石(2,500点及び薄片1,600点)は吉村豊文とその門下生が日本におけるマンガン鉱床の特性と成因の研究を行ってきた過程で収集されたものである。

日本の鉱物標本の三大コレクションの一つに数えられる高辻吉標本(1,200点)は、鉱物約150種を含み、その多くは今日では採集不可能な大型、豪華な結晶標本もしくは特殊な結晶形態のものである。

岡本標本(鉱物1,700点)は岡本要八郎が福岡・長崎両県で新しい産地を探して、採集したものである。個々の標本は福岡県及び長崎県両鉱物誌に記載されている。

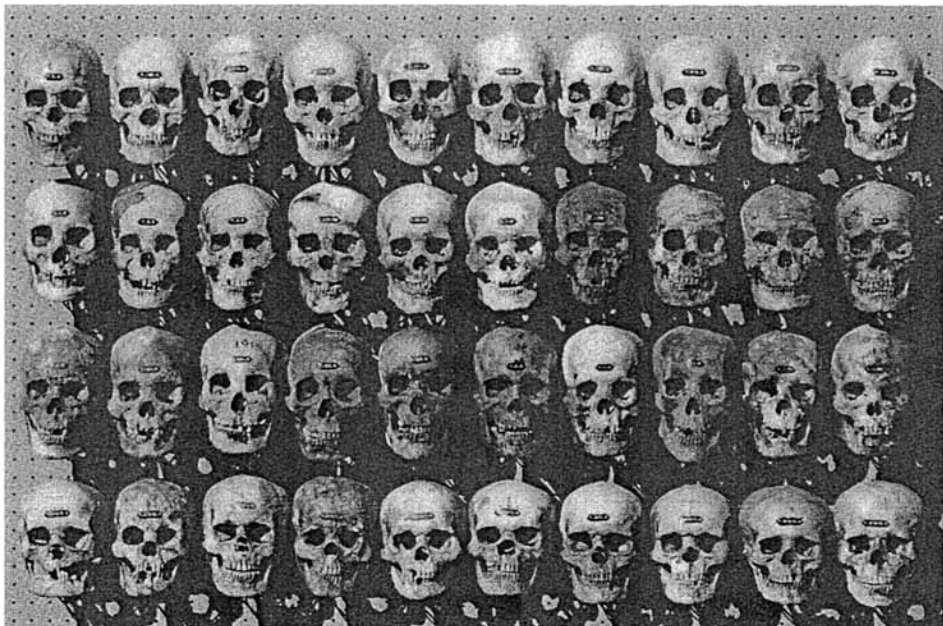
九州の石炭(150点)は松下久道とその門下生が、北部九州の古第三系・下部新第三系の層序・石炭地質学的研究を行ってきた過程で、特に重要な標本を収集したものである。

石炭紀・二疊紀に形成された秋吉台石灰岩の層序、地質構造、生相などの研究が、鳥山隆三とその門下生によって行われてきたが、収集された化石は、フズリナ6,500点、腕足類1,500点、サンゴ450点、その他1,000点以上を含む。新属・新種の模式標本も少なくない。

白亜系アンモナイト・イトセラムス標本(8,000点)は、松本達郎とその門下生が白亜紀層序・地史の研究の過程で、おもに北海道と九州で採集したもので、白亜系の対比には欠くことができない。

東南アジア産無脊椎動物化石は1962年に始まる全国組織の「東南アジア地質・古生物の研究」の実施過程で、当教室所属研究者により収集された。タイ・マレーシアの石炭紀・二疊紀のフズリナ(1,800点)、腕足類(1,700点)、サンゴ類(450点)、フィリピン、ボルネオ、インドネシアの新生代二枚貝・巻貝(2,600点)を含んでいる。その多くは *Geology and Palaeontology of Southeast Asia* 1~25巻に記載されている。

天草臨海実験所の天草近海の浅海動植物相に関するコレクションは、実験所創設以来50年にわたって、歴代所員が周辺の海洋生物相の解明と生態学的研究に努めてきた過程で収集されたものである。整理済みだけで液浸標本約1,900点、乾燥標本1,092点、プレパラート標本40点を含み、天草周辺海域を代表する基準資料である。



西南日本古人骨

医学部解剖学教室保管

形質的に日本民族の成立をたどる上で基礎資料となる古人骨のうち特に弥生時代人骨は戦前において全国的視野から見て大きく欠落していた。

昭和25年、故金閔丈夫教授の九州大学着任以後、東は広島・鳥取県から南は沖縄県与那国島に至る西南日本各地で鋭意発掘調査をすすめた結果、現在までに本教室に収集された古人骨の各時代別体数は下記の如くである。

時代	体数	備考
縄文	55	貝塚人骨
弥生	1304	甕棺及び砂丘地人骨
古墳	516	
古代	6	火葬骨
中世	157	
近世	145	
計	2183	

左表のうち、北部九州弥生人骨は、南島や長崎大学収集の西北九州弥生人と比較して著差を示し、日本における弥生文化の開花域を思い合せた場合、特に重視すべきものとする。

最近では国内の歯学関係者及び外国の人類学者も東アジア的視野に立って時代差・地方差を究明する上での基礎資料として利用することが多くなった。

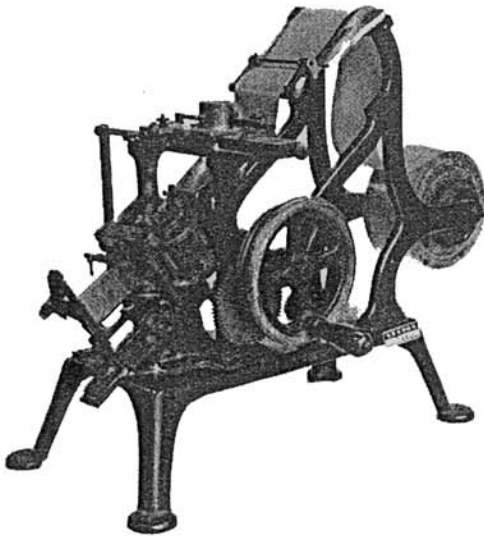
【写真説明】

九州弥生時代人の地方差

上3行 北部九州（福岡・佐賀県の甕棺及び山口県の砂丘地出土）

下1行 南九州（鹿児島県の砂丘地出土）

前者は高身・高顔、後者は低身・低顔で際立った対照が見られる。また北部九州の甕棺使用域から遠ざかった辺地遺跡出土のものには抜歯風習の痕跡が認められる。



九州大学医学部附属病院薬剤部

九州大学医学部附属病院薬剤部には、その前身である県立福岡病院(明治13年設立)時代からの貴重な資料が保管されている。これらの資料は明治、大正にかけての西欧薬剤学の導入の歴史を物語る意義深い資料である。

以下、その主なものを紹介する。

I 機械、器具類

1. DOKAMA 散剂分包機 (写真)

DOKAMA散剂分包機は大正12年(1923年)にドイツで開発、製造されたもので、本機は大正15年3月に購入されたものである。重量約16kg、高さ43cmで、基本構造は現在の分包機と全く同様で、今日の自動分包機の源流として果たした役割は極めて大きい。

2. 古代顕微鏡

18世紀末から19世紀初期の作品で、製作者はBenjamin Martinと記されている。附属品として昆虫の羽根等5組が備えられている。

3. 酒井式坐成型器及び鑄型

初代薬局長酒井甲太郎先生の考案になるもので、成型器は小規模の坐剤の調製には現在でも使用可能である。また鑄型はグリセリン坐剤の調製に使用されたものである。

4. その他

各種乳鉢、薬研、片手切、両手切、手廻式錠剂機等がある。

II 医薬品

明治40年代に入手したBayer, Knoll, Hoechst, Heyden, Roche, E. Merck社などの欧洲諸国からの輸入医薬品が数多く保管されている。種類も豊富で散剂、液剂、注射剂と多彩である。明治末期のわが国の製薬産業は黎明期にあり、そのほとんどが輸入に依存していた時代であり、贗物、粗悪品が出廻っており、上記の医薬品は薬物鑑定のため保管されたものと思われる。

これらのうちBayer社のものはラベルの商標マークから明治28～30年の製品であることが確認されている。

III 生薬類

明治45年3月のリスト中にFol. Hamamelidis, Fol. Rosmarini, Fr. Cardamomi, Fl. Cinaeなど約300種の生薬標本がある。また, Strophanthus Frucht, Cortex CotoなどDr. Theodor Schuchardt (Chemische Fabrik, Görlitz) の生薬標本類も保管されている。

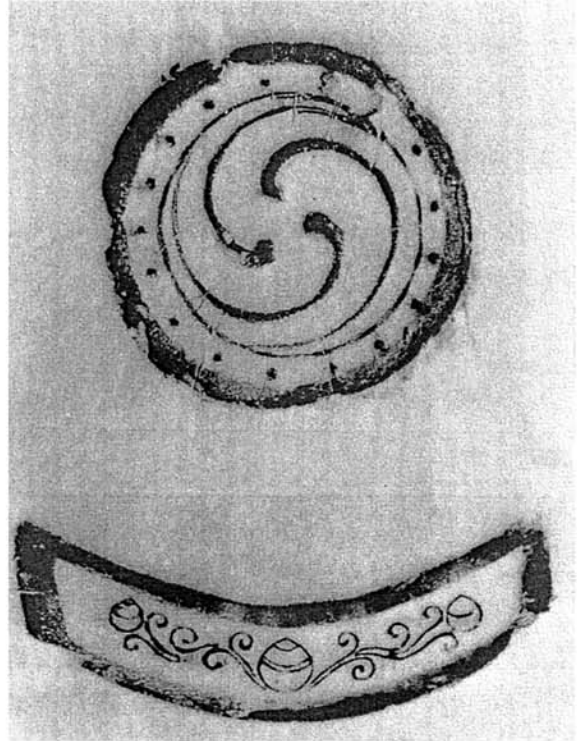
工 学 部

建 築 学 科 資 料 室

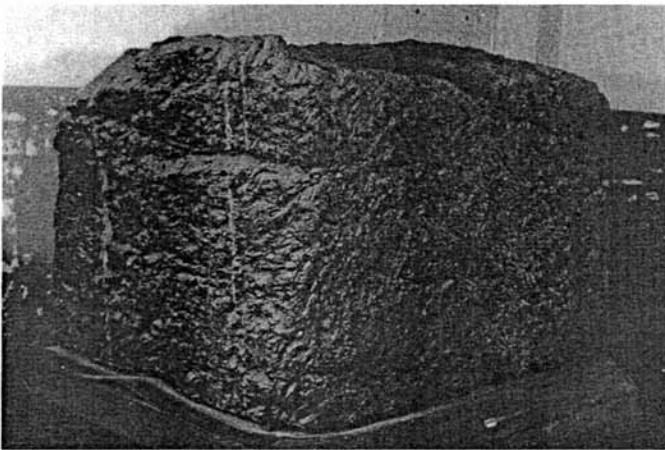
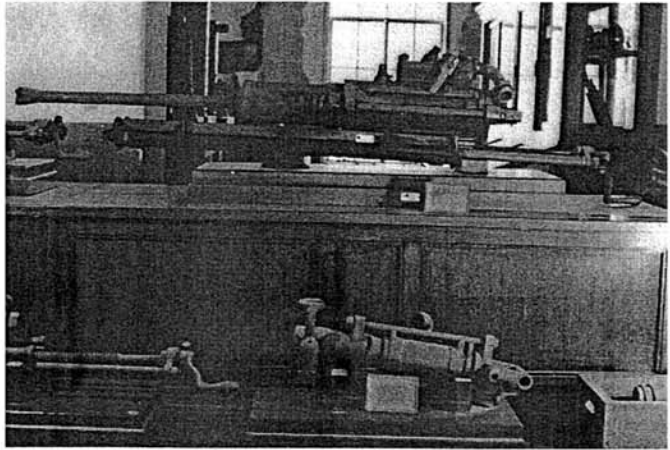
建築学科に資料室を設けてもうすでに14年になるが、資料の蓄積は遅々として進まない。現在まで、殊に系統だてて、又特色あるコレクションを所蔵している訳けではない。発掘調査や民家調査、その他建物を見学した折りにお願いして寄贈を受けた品々、時には解体寸前に廃品回収のごとく戴いてきた装飾品が主で、それらを整理し戸棚に収納しているにすぎない。したがって、主に建築史関係の資料を保管する室で、一般に閲覧していただける設備を備えていない。

現在まで、捨られる運命の建築装飾や解体時の構造材（レンガ、鉄筋、石材）をその都度蒐集し、資料の蓄積に

励んできたのが実状である。まだ途についたという程度の資料点数で、合計200点足らずである。そのうち主な所蔵品を紹介すると、その一つは昭和42年7月7日より9月5日まで2ヶ月間に亘って発掘調査を行った時の出土瓦である。その位置は太宰府旧崇福寺跡で、元和6年(1620)の年号を記す横岳誌によると山門、仏殿、法堂、方丈が一直線に並ぶ禅宗様伽藍配置をしていた。発掘の結果、仏殿と僧堂の規模を確認できた程度で、伽藍全体を把えることはできなかった。その時出土した鬼瓦は仏殿跡からで、その他巴の軒丸瓦や蓮のつぼみを付けた軒平瓦は仏殿跡や僧堂跡から発見された。それらの出土瓦は室町期のものといわれている。瓦として年代的には新しいが、中世の瓦の編年に役立つであろう。次に洋風建築の細部装飾やマントルピースがある。細部装飾には白漆喰を塗った天井飾りや石膏で造った飾りがある。当初は美しかったであろうが、その後ペイントを塗ったために細かい文様がつぶれている。マントルピースは洋間を暖めると同時に室内を飾る重要な家具でもあった。現在旧博多駅と旧知事公舎のマントルピースが一基ずつある。構造材としてのレンガは薄いものから厚いものまで、種々の形が存在したが、そのうち学内外含めて6種類ある。粘土質、焼き方、経過年数により色が全部異なる。レンガ一個一個の単体を蒐集するだけでなく、レンガとレンガを接着させた灰モルタル、セメントモルタルまで含めて所蔵することが好ましいが、そこまで保存していない。その他和釘、神社の本葦股、白や自在鍵の民俗資料、それに几帳等の調度品がある。民俗資料と調度品は飛騨高山から購入した。それ以外の品々に費用をかけていない。そのために時間をかけて所蔵品を増やさなければならない。一方予算化しつつ系統だてて蒐集することも大切だろう。その収蔵庫も必要だろう。今後の課題を多く密め、資料室の充実に励まなければならないと思っている。



工 学 部
資 源 工 学 科



九州大学列品室について

本列品室は別表に示す通り世界各地より集められた大型の標本(水晶結晶、石炭等)および昭和初期に稼行された国内および朝鮮、中国等の鉱山がすでに終掘してしまったかまたは現在の鉱山採鉱法では採集が困難となった標本類および研究上標準になる標本が多数整理されている。また、大正初期から昭和初期にかけて本学に寄贈された鉱山採掘用の機械類等(主に安全燈、サク岩機等)鉱山採掘技術の歴史を示す物品が展示されている。一部には徳川期に使用された佐渡金山の天秤その他も収蔵されている。

向 山 広

工 学 部

生 産 機 械 工 学 科

当教室の最も特色のある資料としてセバスチャン旋盤(1点)を挙げる事ができる。この旋盤は大正元年にアメリカから購入し、機械工学科実習工場に設置された。九州大学の初代機械工作担当教授の岩岡保先生が、アメリカに留学されて購入されたもので、当時としては一流の機械であった。当時より昭和45年頃まで工作実習工場において学生の実習、研究品の製作用として活躍した。駆動方法として、現在の旋盤はすべてモータ直結となっているが、この旋盤は段車駆動方式であり、往時の代表的な旋盤の姿を保っているのです。旋盤の形式の発展の歴史を残す意味で永久保存したい。現在この旋盤は実働はできないが、構造などを見ることはできるようにしてある。

有 浦 泰 常

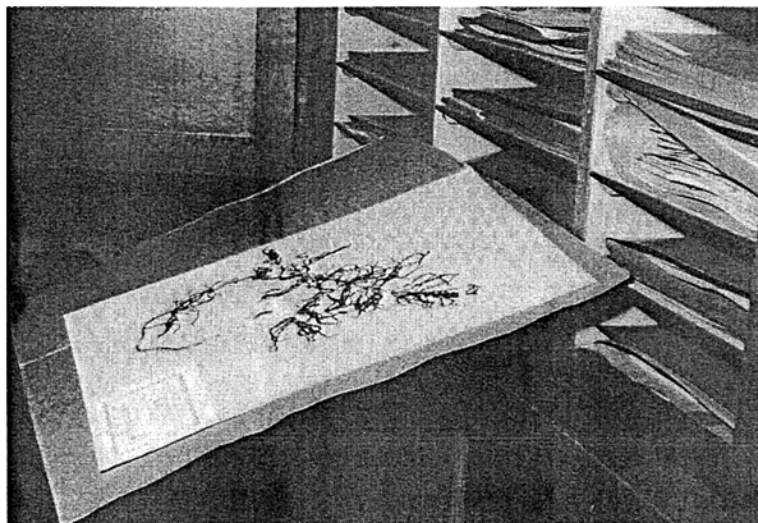
応 用 化 学 科

応用化学科では明治44年学科開設以来、人間生活の向上への寄与をめざして有用な物質と材料を創造する努力を続けてきた。草創期から歴代の教官が当学科で開発した有機・無機の新素材や機器を多数保管しているほか、広く海外から収集した資料もある。これらは科学技術史上きわめて有意義な資料であり、広く活用されることが望ましいが、保管・展示のための専用のスペースがないので、教育・研究のためのスペースと競合する実情である。早急な改善が望まれる。

■ 植物の部 ■

農学部

水産学第二講座



1. 種類

海藻標本。名称：特になし。但し1981年の総覧には「日本周辺産海藻標本」としている。

2. 概数

腊葉標本約38,000点(うちタイプ標本24点)。木製の標本整理棚(190×110×50cm, 72段)14本。種類ごとにジーナスカバーに入れ、1段に1属を原則としている。しかしコンブ属、ホンダワラ属などでは多段にわたっている。

3. 収集の経緯

水産学第二講座が1942年(昭和17年)に開設された際、当時の三井海洋生物学研究所から、海藻の分類、生態を専門とした瀬川宗吉が助教授として着任した。瀬川が材料の収集に努める一方、学部学生や大学院学生による材料も集まり、沖縄、天草、福岡、伊豆の資料が蓄積した。また1957-1960年に行われた流れ藻に関する研究によっても、大平洋側、日本海側の両岸で調査がなされ、多くの腊葉が作られた。1961年には、瀬川が採集し、三井海洋生物学研究所に保管されていた標本のうち石灰藻以外のものの寄贈を受けた。これらのほか、講座発足の当初、藻類の分類学者岡田喜一から割愛されたものや、交換等によって得た外国産のものなども所蔵している。

4. 学術的価値

分類学上の基本となるタイプ標本は、紅藻類16種を含む24点を保管している。瀬川が著した海藻図鑑は、大部分の標本をこのコレクションによっている。また発表された論文の材料となったものは、海藻相的、形態的を問わず、当然のことながら保管されている。

5. 利用状況

藻類研究者の多くない現状では、学外からの利用はあまり多くなく、今のところ管理に忙殺されることはない。

農 学 部

木 材 理 学 講 座

1. 標本の名称

金平亮三コレクション：南洋植物腊葉標本。

2. 標本の規模, 数量

2群に大別され, 1) Micronesia産植物腊葉標本は150科690属にまたがる約5340点の中に, タイプ標本を160点含んでおり, 2) New Guinea産植物腊葉標本には145科642属にまたがる約2611点の中に, タイプ標本を59点含んでいる。そのほか, 戦前の九州大学外地演習林に関連する標本も, 多数含まれている。

3. 収集の経緯

木材理学講座第二代教授(1928~42)金平亮三は, 1930年から38年にかけてミクロネシアで, 1937年にはニューギニア東部で, 1940年にはニューギニア西部でフロラ調査を行った。その際の採集標本が金平コレクションである。

4. 学術的価値

国内・外の植物分類学者に極めて著名な腊葉標本であって, 学術的価値が高いことは万人の認めるところである。なお, この標本に関連する研究で, 金平亮三が帝国学士院賞(1937年)を受賞した。

1. 標本の名称

国産材・外国産材の材鑑標本。

2. 標本の規模, 数量

3群に大別され, 1)国産材, 2)外国産材-I(台湾産材), 3)外国産材-II(アジア, オセアニア, 北・南米, アフリカ, その他の地域産材)で構成され, 総数5650点を超える材鑑標本で, ほとんどの材鑑には検鏡用永久プレパラートが用意されている。

3. 収集の経緯

1922年の講座創設以来, 九州大学演習林, 旧大林区署と現営林局, 旧台湾総督府, 海外研究機関との交換, その他で収集した標本であり, 60余年の講座関係者の努力のコレクションであるが, 今後も着実に充実の方向にある。

4. 学術的価値

わが国の材鑑コレクションとしては, 質的に最高位のものの一つである。この中の外国産材材鑑のほとんどが, 海外の大学, 博物館, 試験場などとの交換で収集されたものであるので, 出所・由来が保証されていて, 学術的価値は極めて高い。

1. 標本の名称

内外産樹木の円盤標本

2. 標本の規模, 数量

国内と北米で有用樹種と称される樹木の樹皮付き円盤標本で、約65点で構成され、直径約2 mに及ぶ標本も含まれている。

3. 収集の経緯

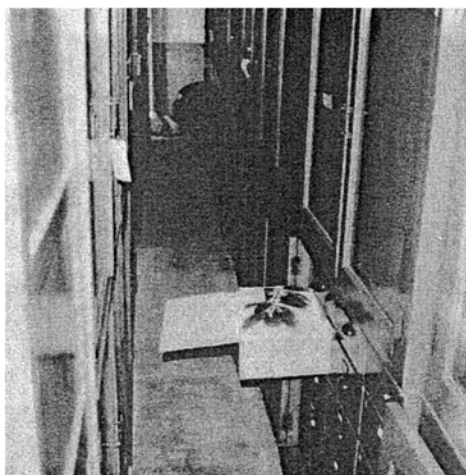
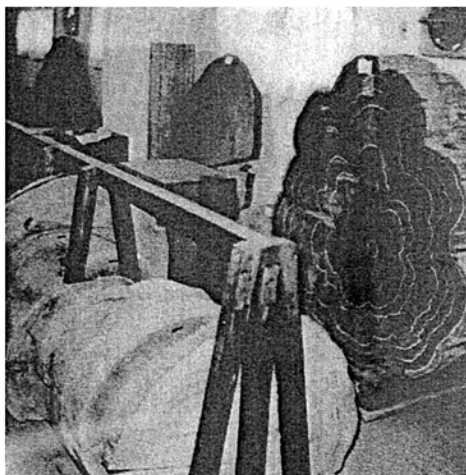
円盤標本の大部分は、九州大学農学部に林学科が創設されて以来、木材理学講座はもとより、林学科と演習林の全スタッフによって収集されたものである。しかし、収集にまつわる断片的な情報はあるものの、今では詳細な経緯にさかのぼれないほど歴史的にも古い、重要な標本となっている。

4. 学術的価値

円盤標本を収集すること自体が極めて困難な現在の森林状況にあり、今後、このような広範囲にわたる標本を収集することはできないであろう。それだけに、天然生林木の生長の経過を、実物で歴史にとどめる貴重な標本である。

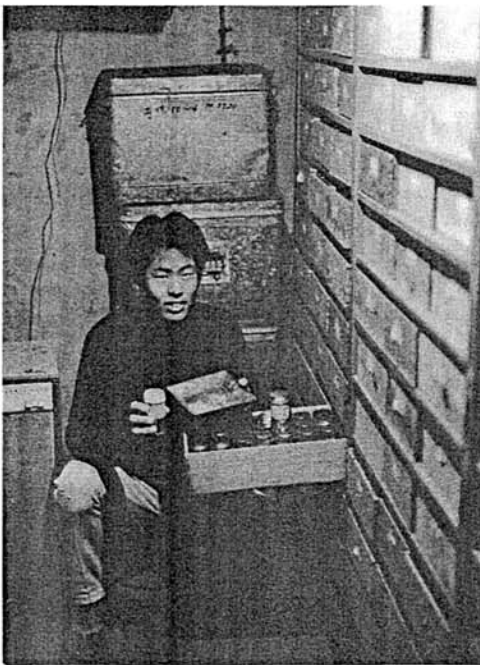
上の3種の標本の利用状況

学内に限らず、海外の研究者も来訪して利用している。しかし、散逸を防ぐために学外貸出には応じていない。材鑑標本は一部を切り取り、災害対策として農林水産省林業試験場にも保管している。



農 学 部 造 林 学 講 座

1. 種類, 名称
植物腊葉標本, 初島コレクション。
2. 数 量
約4,000点
3. 収集の経緯
昭和6年から昭和22年まで九州帝国大学農学部助教授として在職した初島住彦氏（現在鹿児島大学名誉教授）が、在職中に日本国内をはじめとし、当時大学演習林のあった朝鮮半島、樺太、台湾のそれぞれの演習林を中心として、主に種子植物とシダ植物を中心に採取し標本としたもので現在に至る。
4. 学術的価値
主に九州を産地とし、初島氏が命名したタイプ標本が約50点含まれている。
5. 利用状況
学内では教育上の資料として利用され、また学外では福岡植物友の会、福岡植物研究会などのメンバーに利用されている。



農 学 部 農 学 第 一 講 座

1. 種類, 名称
イネの種子標本。
2. 数 量
日本在来品種, 外国品種, 長崎原爆被爆後代系統, 突然変異系統, 標識遺伝子集積系統, 相互転座系統, 三染色体植物系統など約7,000品種(系統)を系統保存しているが、種子標本作製しているのはこれらのうち約3,000品種である。
3. 収集の経緯
本講座創設当初から継続しているイネの系統保存事業の一環として収集、保存されているものである。1922年に当時の農林省農事試験場畿内支場に収集されていた日本各地の在来品種を譲り受けたのに始まり、その後、国内外から収集したものを加えて現在に至っている。また、突然変異系統, 標識遺伝子集積系統, 相互転座系統, 三染色体植物系統などは積極的に作出を続けているので系統数は増加の一途をたどっている。
4. 学術的価値
保存系統の中には他ではみられないものが多く、栽培イネの遺伝、育種に関する研究・教育上の価値が高い。
5. 利用状況
本講座で行っている栽培イネの遺伝、育種学的研究は、すべてこれらを活用したものである。また、国内外の研究者にも広く利用されており、種子の分譲依頼は年間数十件に及んでいる。種子標本は展示あるいは教材としての利用が多い。

農 学 部

栽 培 学 講 座

1. 名 称

九州産種子植物・シダ植物標本

2. 数 量

約20,000点 (うちタイプ標本数点) 標本棚 20

3. 収集の経緯

本講座の前身、植物学講座の時代に額綱理一郎と竹内亮が、1922年以来、約20年間にわたり収集整理したものである。その後、1970年代後半より、イネ科植物の世界的な分布に関する研究が着手され、関連してオーストラリア、印度、パキスタンのイネ科標本の一部が収集されている。

4. 学術的価値

本コレクションは、九州における種子植物及びシダ植物の大部分を集めている。特に天然記念物に指定されている福岡県宗像郡玄海町にある沖の島の維管束植物(72科180種)、蘚苔類(14科17種)、地衣類(6科17種)のすべてが集められている。同島は暖地性植物の分布北限地として植物学上重要であるが、宗像大社の信仰のおきてから、現在でも調査および植物採集が許可されていない地域である。本標本は1932~33年に行われた学術調査の際の収集資料であり、学術的価値が高く、貴重な資料として評価されている。

5. 利用状況

九州大学の教官、学生の利用のほか、学外の利用に供されている。

熱帯農業研究センター

1. 種類、名称

植物腊葉標本、中島コレクション

2. 数 量

約28,000点

3. 収集の経緯

福岡県林業試験場技師中島一男氏が昭和4年より昭和26年まで福岡県産種子、シダ植物を中心に採取し標本としたもので従来九州大学理学部に保管されていたが、これを当センターで現在管理している。さらに最近学外からの寄贈、学内研究者の採集活動によって標本が蓄積されている。

4. 学術的価値

戦前の福岡県産のほとんど全てを網羅した標本であり、消滅した種、新出現した種を知ることが可能となり、福岡県植物社会の研究に不可欠なコレクションである。

5. 利用状況

学内では、教育上のサンプル、分類学研究、C₄植物研究に利用され、学外では福岡植物友の会、福岡植物研究会、高校生物部会などのメンバーがよく利用し、植物分類及び県産植物分布の研究に役立っている。

■ 動物の部 ■



農 学 部 動物学講座

1. 標本の種類
節足動物門甲殻十脚類
 2. 標本の規模, 数量
国内, インドおよび太平洋全域におけるエビ・カニ・ヤドカリ類, 口脚類の標本で, 約2千種にまたがる約14万点 (タイプ標本: 200点) の標本を所蔵する。
 3. 収集の経緯
収集は1920年代からであり, 大島広, 三宅貞祥両教授およびその門下生によって国内, インドおよび太平洋全域に渡って集められた。
 4. 学術的価値
国内では最大規模の標本点数であって, 現在では採集できない地域の標本, あるいは絶滅種も含まれており学術的に極めて価値が高い。
-
1. 標本の種類
棘皮動物
 2. 標本の規模, 数量
国内, 熱帯サンゴ礁地域のウニ・ヒトデ類の標本で約120種にまたがる約400点の標本である。
 3. 収集の経緯
主に1920年から1940年代に収集された国内および熱帯サンゴ礁地域の標本である。
 4. 学術的価値
現在では採集できない地域の標本も含まれ学術的に貴重である。
-
1. 標本の種類
両生・爬虫類
 2. 標本の規模, 数量

特にサンショウウオ類の約15種、約200点の標本を含む。

3. 収集の経緯

これらの標本は1920年から1930年代にかけて採集された国内産の標本である。

4. 学術的価値

環境変化に伴い現在では採集できない地方の標本が多く、現在の自然環境と比較する上で貴重である。

1. 標本の種類

哺乳類

2. 標本の規模、数量

国内、外のげっ歯類(天然記念物指定の動物を含む)、食虫類および翼手類などの小型哺乳類を主体とし、国内産の兔類、食肉類、偶蹄類および霊長類の標本約650点を保有する。

3. 収集の経緯

収集は1950年代から現在も継続中であり、特に琉球弧島にのみ限産するケナガネズミやトゲネズミなど現在天然記念物に指定されている動物標本を所有する。なお、外国産げっ歯類、食虫類および翼手類に関しては海外研究機関との交換等によって収集したものが多い。

4. 学術的価値

天然記念物に指定された動物を含む国内・外から収集された小哺乳類の標本は系統分類学的研究および動物学に関する教育資料として極めて重要である。

上記3種の標本に関する利用状況

学内に限らず、海外の研究者もこれら標本を利用している。

農 学 部

昆虫学講座

A. 全コレクション

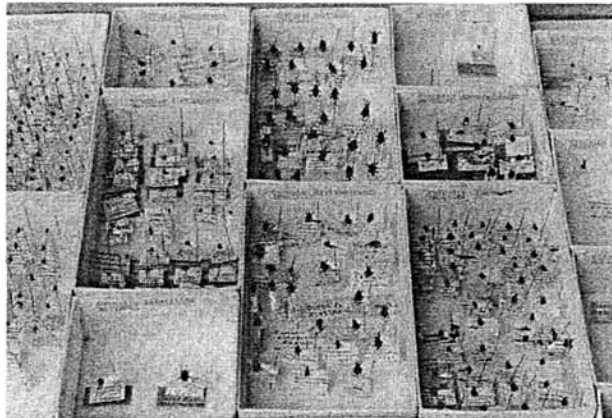
1. 全昆虫標本

2. 保有総点数 280万点

3. 収集の経緯 昆虫学教室の創設(大正10年)以来積極的に標本の蒐集を継続しており、その採集範囲は日本国内はもとより、東アジア、ニューギニア、オーストラリア、ヨーロッパに及び、毎年莫大な数が追加されている。

4. 学術的価値 日本最大の昆虫コレクションとして、東アジアの昆虫系統分類学上最も重要

標本箱内での昆虫標本
保存状況



な標本を含み、その中でも下記のコレクションは特に貴重なものである。

5. 利用状況 世界各地の研究者によって積極的に利用されており、論文に使われた標本は21万点、タイプ標本は1,400点に達する。

B. 特記すべきコレクション

- a) 1. 名称 ミクロネシア産昆虫・多足類標本。
2. 数量 乾燥標本26,100点, 液漬標本1,500点。
3. 収集の経緯 江崎悌三が1936年から40年にかけて3回にわたる長期間の昆虫調査を行った際、採集したものである。
4. 学術的価値 世界的に貴重なミクロネシアのコレクションで、その後の昆虫相の変遷を知る基礎資料となっている。
5. 利用状況 直接このコレクションに基づいて書かれた論文・報告書は80編以上あり、1954年からアメリカで分類群ごとに出版されている“*Insects of Micronesia*”シリーズでは中心をなす標本として利用されている。
- b) 1. 名称 杉谷岩彦コレクション
2. 数量 36,000点
3. 収集の経緯 蝶の研究者として著名な杉谷岩彦が朝鮮半島で採集した蝶の標本が中心で、交換により入手した世界各地の蝶や蛾を含んでいる。
4. 学術的価値 現在朝鮮半島北部の標本はまったく入手できないが、このコレクションは朝鮮半島各地の標本を含み、しかも種ごとに整理されているために種内変異、地域変異まで調べることができる貴重なものである。
5. 利用状況 これまで杉谷コレクションとして直接の論文は書かれていないが、多くの論文で比較標本として利用されており、現在も利用者が後をたたない。



満杯になった昆虫標本室

- c) 1. 名称 膜翅類標本
2. 数量 35万点。
3. 収集の経緯 安松京三・平嶋義宏らによって日本や太平洋地域から採集されたものである。
4. 学術的価値 天敵である小型ハチ類やハナバチ類は特によく集められており、約100種のタイプ標本を含んでいる。
5. 利用状況 この標本によって書かれた論文は250編余にのぼり、また最近では外国の研究者による利用も多くなっている。
- d) 1. 名称 半翅類標本
2. 数量 13万点
3. 収集の経緯 江崎悌三が特に意を注いで集めたもので、武谷直、宮本正一らの標本が加っている。
4. 学術的価値 日本の半翅類として最もよく整理されたもので、特に水棲類は日本産全種を含んでいる。
5. 利用状況 この標本によって今までに70編の論文が発表されている。

農 学 部

水産学第二講座

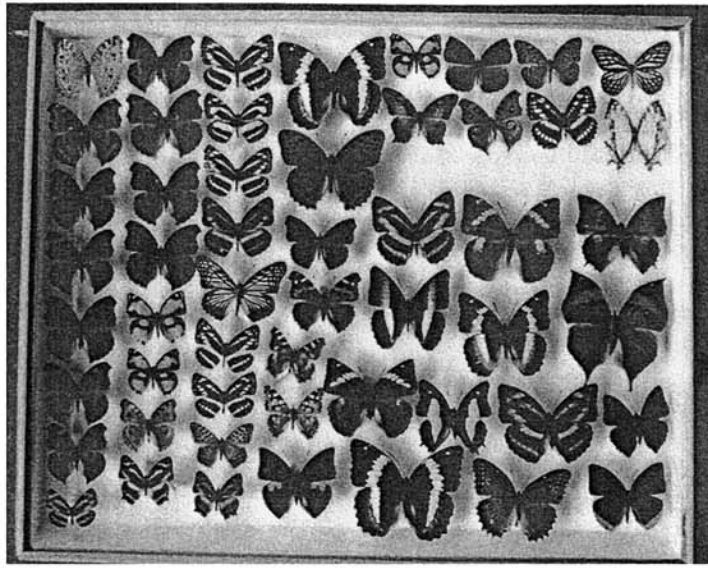
1. 種類, 名称 魚類生活史標本
2. 数 量 標本瓶約20,000本(個体数約205万尾), このうち, 整理済み分6,700本(約68万尾)。魚卵, 稚魚を中心とするため, 個体数が極めて多い。
3. 収集の経緯 水産学第二教室は1942年(昭17)の講座開設以来, 水産動物部門では内田恵太郎, 塚原博を中心として魚類の生活史研究を行っている。その主な研究水域である西日本の陸水, 河口域, 沿岸あるいは沖合域で魚卵, 稚魚及び成魚の標本を収集してきた。更に, 標本の一部は内田恵太郎が戦前に収集した朝鮮産魚類の標本も含まれている。このほか, 東京大学, 水産庁や各県水産試験場の調査船が採集した温帯から熱帯太平洋のほぼ全域に及ぶ外洋の稚魚標本も, 大量に収集されている。標本の収集と研究は現在も継続中であり, このコレクションは, 今後も増加の予定である。
4. 学術的価値 近年, 発展しつつある栽培漁業の基礎をなした魚類生活史研究に貢献した貴重な標本が多い。また, 魚類の分類や分布, 種類ごとの生態や生活史, 環境と卵稚魚の分布との関連を明らかにし, 魚類の進化, 系統等の基礎学問ばかりでなく, 魚類の増殖や資源の動態研究等の応用学問を今後も追求するうえで不可欠な標本である。
5. 利用状況 講座での研究, 教育以外に, 他大学(鹿児島大学, 長崎大学, 宮崎大学, 水産大学校, 広島大学, 東京大学等), 水産庁(西海区, 遠洋, 東海区水産研究所等), 各県水産試験場及び外国の研究者により利用されている。現在, 未整理標本のうち, ハダカイワシ類(鹿児島大学), 無足類, コイ科を中心とした淡水魚, トビウオ類, シイラ類, イボダイ類, フグ類(九州大学)について整理中である。



農 学 部

畜産学第二講座

1. 種 類
家畜および野生哺乳類の頭骨標本
2. 数 量
1)家畜: 12点 2)野生哺乳類: 23点(内訳; 霊長類2点, 兔類1点, 齧歯類2点, 長鼻類1点, 奇蹄類2点, 偶蹄類5点, 食肉類10点)
3. 収集の経緯
加藤嘉太郎が家畜と野生動物との頭骨の比較研究のため収集したもので, 1950年頃から動物園やサーカス団から死亡した動物の寄贈を受けて標本を作製したものである。
4. 学術的価値 特になし
5. 利用状況
研究教育上, 家畜の頭骨との比較観察のために利用している。



教 養 部 理 系

教養部理系教室では、とくに生物学・地学両教室の標本収納に問題が多い。その逼迫した状況の代表例が、写真に見られるような昆虫標本の収納状態である。標本を入れた木箱は収容棚を置くスペースがないため、床の上に積み上げられたままになっており、さらに箱の中のものも未整理標本で、例えば蝶類は展翅がまだ済んでいず、三角紙に入ったまま重ねられている。これらを展翅し研究に供せられるようにすればさらに一層のスペースが必要となる。

衆知のように標本には国際的規約により永久保存が義務づけられているものもあり、また写真の木箱にはアフガニスタン、ネパール、朝鮮半島、東南アジア等で採集された、再入手がもはや絶望的な貴重なものが入っている。

これらの昆虫標本は、火災や地震による焼失・破壊については現状でも一応その懸念は薄いですが、虫害やカビによる破損の危険性が甚だ大きく、防虫と乾燥に頭を痛めている。このことは、地学標本でも一部酸化、水酸化・潮解などに注意しなければならないが、昆虫の場合は保管上の基本的大問題であって、歴史学・考古学的資料や美術品の保守管理と全く同質であり、現況ではせいぜい大量のナフタリンを標本箱の中に入れるという程度のことしかできず、その気化消失分の補給さえ、床上に箱を積み上げた状態では意にまかせないのである。

現在保管されている未整理標本を研究教育上利用しよう分類収納するためには、かなり広いスペースを必要とし、昆虫だけでも、現在標本を置いているスペース^(註)(80㎡)の5倍程度は是非確保したい。

〔註〕専用標本室のほか、各教官研究室、廊下の一部その他を含む。

教 養 部 玉 泉 館

教養部構内。図書館の東にある玉泉館は、旧制福岡高校の玉泉大梁教授が、大正末期から蒐集された考古学資料や古文書などを収蔵するもので、その完成は昭和5年3月にさかのぼる。今日、ここには九州を中心とする日本全域、中国、朝鮮半島などからの約6,000点の考古学資料、糸島郡の庄屋三苦家文書を主とし、黒田藩関係文書その他文禄から明治に至る約4,000点の古文書、近年蒐集した名家書翰集、前原一誠関係資料などがあるが、それらは数量の多さのみでなく、学術的にも価値の高いものも多くみられ、学内・外の考古学や美術史の講義資料、博物館・資料館での展示などへの貸出しもおこなわれている。

玉泉館の建物は、コンクリート平屋建てで、面積約140㎡であるが、本来これは鉄筋2階建てとし、1階は収蔵庫。2階を展示室にするという計画であったのが、予算の関係で結局1階のみになったといわれる。昭和14年、東側に古文書陳列と研究会のために約115㎡の木造平屋が建てられたが、これは当初から全く別の目的に流用され、近年、老朽化のためにとりこわされた。

このように玉泉館は、建設された時点から、その収蔵資料の量からみてスペースは非常に狭いという状態であり、現在の展示ケースも、本来の展示よりも考古学資料などを詰め込んで収蔵していると言ってよい有り様である。さらに、購入・寄贈などで増えている古文書も展示は不可能なため、ダンボール箱に詰めて積み上げておくほかはないという状況になっている。

できるだけ多くの考古学資料や古文書を展示し、そこから学生などに様々な関心・研究意欲を生み出させることが、こうした資料館の役割として重要なのであるが、そのスペースの不足と人員の不足(現在、週1回半日のみ開館)などからみて、それを望むのは困難である。玉泉館収蔵資料がその価値を発揮するためにも総合資料館の建設が待ち望まれる。

おもな資料

旧制福岡高等学校教授の玉泉大梁氏らが永年にわたって収集された考古資料や歴史史料、さらには民俗資料などを収蔵、展示している。収蔵、展示品は、北部九州の出土品を中心として、朝鮮・中国・東南アジア、はてはギリシヤ・ローマ・アフリカまで、広範な地域の遺品を含み、それらの年代は、先史時代から近代にわたる。

日本の出土品は、国内各地の縄文土器破片にはじまるが、やはり福岡県内出土の弥生時代遺物が多い。そのなかには、福岡市今山の石斧、筑後早津崎の甕棺をはじめ、春日市須玖岡本出土の細形銅剣など、目を引くものも少なくない。古墳時代では、久留米市草野の宮崎邸内古墳出土の一括遺物は、後期の代表的遺物として貴重である。考古資料で特色がみられるのは古瓦であって、白鳳時代から江戸時代まで、玉泉館ほど各時代の古瓦が揃っているところは九州では珍しい。一例を挙げると、福岡市老司瓦窯跡出土の白鳳時代の優品である軒平瓦にはじまり、大宰府の都府楼・観世音寺・筑前国分寺・般若寺などから出土した古瓦類、福岡市城の原麿寺跡出土の「警固」銘瓦、そして、筑前名島城・肥前名護屋城・筑前福岡城などの近世の古瓦類などまで知られる。そのほか、福岡市飯盛山出土の経瓦や陶製経筒は貴重品であり、また、博多出土の陶磁器類も目



を引く。

玉泉館収蔵品のもう一つの特色は、外国資料が豊富なことである。朝鮮関係では、先史時代の櫛目文土器、原三国時代の陶質土器や楽浪古墳の使用博、三国時代の新羅土器と高句麗・新羅古瓦、そして、高麗時代の銅鏡等々がある。中国に関して、六朝時代の明器である男子像と女子像に、唐代の明器である女官像・騎馬武人像・武人像など優秀な作品が目につく。そして、漢鏡や宋鏡も見落せない。

外国資料では、貨幣が目目される。古くは、中国・ギリシヤ・ローマ・スペインのものが若干と、近代のヨーロッパ各国の貨幣がみられる。民俗資料では、台湾の現地人が使用していた土器・盾・囊・網・布・弓・矢・刀や、ジャワ島発見のいわゆるクリス形鉄剣など、現在では入手困難な遺物がある。そのほか、ニューギニアから将来された石製投弾は、弥生時代のこの種の土製品を連想させたり、また、沖縄県浦添城跡出土の「高麗瓦匠造」銘瓦に、高麗と琉球の交流を想起させてくれる。日本近世史の史料にも重要なものが保管されているが、とりわけ「三苦文書」は有名である。

昭和59年12月23日 編集

昭和60年3月5日 印刷

九州大学所蔵標本・資料

編集 九州大学総合研究資料館設置準備委員会

印刷 経理部経理課印刷掛